

2/25 朝

# 俺たちの漁一進一退

船のエンジン音がけたたましく鳴る。3日午後、福島県相馬市の松川浦漁港に沿岸の海から底引き網漁の船が次々と戻った。水揚げされたのはマダラ、アンコウ、ズワイガニなどだ。

底引き網漁師の佐藤幸男さん(56)がこの日の収穫は約500kg。魚は地元の鮮魚店や東京・築地などに出荷される。震災前は週5日出ていた漁も週2回だけだ。「俺が生き残っているうちに、かつての漁に戻ったらいいんだが」



福島からの報告 ③

黒潮と親潮がぶつかり「潮目の海」と呼ばれる福島の海。200種類近い魚介類がとれる豊かな漁場だ。東京電力福島第一原発の事故直後、高濃度の汚染水が海に流された。周辺の魚から国の基準値を超える放射性物質が次々

に検出され、福島沿岸の漁は自粛に追い込まれた。佐藤さんは「泳いでいるとわかってはいる魚がとれない。とにかく歯がゆかった」。



安全性が確認できた魚に限って少しずつ流通させ、市場の反応を見る。2012年6月、「試験操業」はそんな狙いで始まった。その後も原発では、汚染水が漏れるトラブルが相次いだ。佐藤さんは「漁の環境が一步前進したと思ったら後退する。一進一退の5年間だった」と振り返る。沿岸の水揚げ量は、いままも事故前の6%にとどまる。

汚染水を増やさない手段として東電はまず「地下水バイパス計画」を打ち出した。地下水を原発の建屋周りで汚れる前にくみ上げて

海に流す方法だ。

「たとえ安全な水でも海に流せば魚のイメージが悪くなる」と漁業者から反対の声が相次いだ。だが、対策をとらなければ高濃度の汚染水が処理しきれなくなり漏れる危険がある。14年8月、漁業者たちはやむなく放出を容認した。ところが約1年後、汚れた雨水が港湾外に流れた。それを東電が公表しなかったことで汚染水問題が再燃した。

その後、汚染水対策は段階的に進んだが、「マイナスイオン」だけが注目されるようになってしまった」とある漁業者は嘆く。漁業者の暮らしは東電か

らの賠償金に頼らざるを得なくなった。試験操業をしながらも、震災前の水揚げ実績の約8割を受け取れない中、試験操業に取り組まない人もいる。

一方、時間とともに海中と魚の放射性物質は減った。事故直後は、採取した魚の半分ほどが国の基準値(1kgあたり100Bq)を超えたが、昨年調べた8500サンプルのうち基準値超えはシロメバルなど四つだけ。試験操業でとれる魚は3種から72種に増えた。供給量が極端に少なく単純に比べられないが、試験操業でとれた魚は他県産の

8〜9割の値段だという。「ブランドが地に落ちたままでは、操業を拡大しても採算が取れない」。いわき市漁協販売課長の新妻隆さん(56)はいう。

試験操業の対象の沿岸部だけでなく沖合のカツオやサンマなどの漁も影響を受ける。福島の港で水揚げされる「福島産」として扱われるため、水揚げが敬遠される。県水産課によると、沿岸漁業を除く県内の水揚げ量は14年が約5600トンで、震災前の4割ほどだ。

親子連れでにぎわういわき市水族館アクアマリンふくしま。来場者の前でアイナメが放射性物質濃度の測定機に入れられる。スクリーンには「不検出」と映し出された。事故後に生まれた魚は、まず国の基準値は超えないですね」と同館の獣医師富原聖一さん(43)。毎月、原発近くで釣った魚を測り、現状を伝えるイベント「調べラボ」の一場面だ。東電や政府の情報は信用できるのか。そんな疑問を解消しようと、地元の人たちが自ら調べて情報を発信している。富原さんは「福島のが蓄まるとは知ってほしい」と話す。(池田拓哉、高橋尚之)